



くぐりぬけた女



島さち子

くぐりぬけた女

装
画

島
さ
ち
子

くぐりぬけた女

女は体の中を横切っていく翼のように大きな耳になって、ぶはつぶはつという音を聞きつづけたあと、まだよく拵がりきらない眠い小さな耳に戻って渦巻いてくる同じ音を聞く。

じっと動かずにいて、やっと起きあがる。いたずら着ふうの寝巻を細い腰のあたりまで滑り落して廊下に出るが、すでにそこまで充ちてきている真っ白な湯気が、素早く女の全身を包んでしまふ。浴室で沸騰したお湯が活火山のように噴出しているらしい。

女は何ひとつ目印なしに進んで、熱風のかたまりに口をふさがれ、慌てて身に纏っていたものまで取り落として見失う。吐息は変に甘いしめった声になる、わかるのは怒張してくる首の脈拍。熱い蒸気は女の体のいたるところから汗を搾り出して皮膚の表面を水溜りにする。

「お湯を入れておきますよ」

母が出かける前に言ったようでもある。女は水分でふやけてくるにつれて、しっとりうるんだ若い娘から、あぶらぎった中年女に、さらにほうぼうに皺を束ねた老女に変貌してしまう。源を探す女の手さぐりはにせもので、濃霧のなかの身のない皮膚のゆれ、どこにも届くはずのない手探りだ。物の落ちる、しめった音がする。換気装置の電源は入れてあっても、外から吹き込む逆ねじの烈風で、完全に回転が押さえ込まれてしまうこともあり得る。沸騰する熱い蒸気はますます濃くたちこめ、女はあせればあせるほど、身体じゅうの膨らみやくぼみから、汗を搾り出し、もう全身はよじれた細紐。皮膚は汗を吸い蒸気にまみれ、ますますふやけて伸び、面積を広げきって、女の縮んだ小さな実体をチリのように中に閉じ込めた大袋になってしまう。

白く何処までも広がる皮膚の内部の宇宙、女から剥離していった白い平原が細い三角の漣模様を描き、ずっと向こうには白い山脈が、うねうねと地から天空までつづいている。

足下は軟らかく、踏めば伸びる弾力性を持ち、しかも熱風で外側からあおられているから、女は思いがけない飛び跳ねかたを繰り返し、地面の皺につかまって助けを呼んでしまう。

誰一人住んでいるはずのない自分の皮膚のなかにいて、助けを呼ぶことは、自分を呼ぶことにほかならず、返事は忘れられつつ放し。女は止まらずに踏みつづけて足の下をかためようとするが、その動きで身体は螺旋状になり、反対の捻りがきて、また反対の捻りがきて、ヘナヘナに縮んだしぼりかすになり、自分の痕跡を失いそうだ。

一度も抜け出した覚えのない自分の皮膚のなかにいて、女は敵に囲まれてゐるよりも遙かに用心深く、何ものにも負けないように身構えているが、何一つ身につけていない無防備、石ころ一つ転がっているはずもない。目の中から色彩のある涙が転がり出してくるのを待って慰められ、体を支える。身を躍らせて皮膚の溝に飛び込み、自分のいる位置を把握してみる。倒立してみても天は地に地は天に早変わりして、すましている一続きの拡散。小さく縮んで胸も尻もなく、振れた姿から目を反らしつづけている限り、重力の方向さえ見失いそうだ。

やっと、ひとりしかいない安堵の気持ちがある。もともと周囲にあるものに対して愛着を感じたことなどなかったのだから、人からも物からも影響を受けない純粹な人間になれるというものだ。

誰のでもない女ひとりの所有物としてある宇宙、これくらい巨大な孤独は小気味いい、膨大な白一色でうつろに貧血をおこしている丸裸の所有権だ。

女は自分ひとりのお祭りのように、マツ毛に残っている涙の玉を輝かせる。宇宙全体が白い波頭をたてている。海のしぶきのような塩味の飛沫が口の中に入る。女は陶酔めいた眩暈で、彼女の匂いのまだ一杯残る自らの表皮の白い影に混じり込む。現在が穏やかで、静かな記憶のように、そのあたりに溶解する。

いままで、いっだって、女の外部とのかかわり合いはその表皮だけのことだったのだ。表皮のなかに青い匂いの過去の幼い彼女が生き生きといる。

風が吹き、すらりと並ぶ緑色の葉がなびき、火ぶくれになって泡だった葉がくるくる回る。

彼女は餌をあさるヒナのように、口を大きく、斜めに、縦に、桃色に開き、髪を振り回し、口で葉をつかまえようとする。風は葉を口に近づけながら、届かない前に、ぱっと取り上げるいたずらをしている。

彼女の頬は熱い。十人いる子供の九人が頬を真赤にし、葉を塗りつけてもらっている。

「わたしにも！」

彼女は老婆に向かって叫ぶ。老婆は九人の子供を連れて二階にのぼって行ってしまい、階下には彼女が一人ぼっちで放り出されている。もっと泣き叫ばなければ……。彼女は階段をよじ登っていく、急傾斜でつるつる滑り、上でひそひそ声、子供の声はひとつも聞こえない。

上の方は天国のように明るく、彼女は小さい鼻から上だけを二階に現す。広間に九人の子供たちが死んだようにぐったりと寝転がっていて、よく見れば耳まで異様に赤い。誰も彼女の方に気づく者はいない。

そっと歩き、彼女はみんなのそばに転がり、眼を開けたまま、静かな寝息に似た息を試みる。半死に見えた子供たちは一斉にごろごろ転がりだす。

「医者がかかるぞ！」

爆発したような声が一人の子から発せられ、子供たち全部が跳びはね、ぶつかり、駆け抜け、逃げて、残ったひとりぼっちは彼女だ。剣ほどの大きい注射針が彼女の小さい腕にさしこまれ、九人分もの得体のしれない大量の薬がつぎこまれてしまう。彼女の腕は赤く膨れ上がる。

「大きな音で破裂するの？ パーンというのね」

彼女は体中を熱くして泣く。体中熱くなって、かゆくなって、顔を風になびく葉でこする。見えない粉が飛ぶ、かゆい、どこもここも。

かゆい、女は過去を引き寄せ、かゆみを探しはじめる。大丈夫、爪はきれいに生え揃っている。耳のうしろをそうっとかく、そこではない、どこでもない、頭……髪があり一本一本が生きてはねあがっていたところ……何故か崩れたテントの骨のような固いものが尖って刃向かっている。腰、脇、顎、首、どこにもかゆみの場所はない。でも、かゆい。

女はやみくもに動き回ることと息をつき、また動き回る。白い山脈をふみこえ、鍾乳洞をくぐり、盆地で足踏みをする、もう少し足踏みをしてみる。女は暫くぞつととして佇み、もつと激しい足踏みをする。あ……かゆみは今踏みつけたその場所にあつたのだ。

かゆみは白い天地、彼女の剥離した皮膚の宇宙に匿れて刻み込まれたかゆみなのだ。

女は一つのそれを退治した歓喜で心を広くし、登山家の勇氣と辛抱強さをもって、十九年も過ぎたいま、幼いころの病氣のかゆみに手を届かせるために、谷を下りはじめる。

地図も磁石もない旅。女の裸の涼しい影がそっと落ちるが、すぐにかゆみの熱におかされ、駆けて谷を飛び越え、飛びそこない、膝を地面の皺にめり込ませて蹲る。

さつきまで、かすかに聞こえた熱風の音は、ますますうつろにゆるやかにになって、ついに完全に沈黙する。

耳の底に音の残滓がまといついていたのかもしれない。振り向き、窺う。手をどんなに動かそうと、しまいに顎を支えて動きを中断するしかない、女は茫然とする、時々屈んでみる。

綺麗な細い銀色の溝がクモの巣のように走り、クリーム色にけぶる半透明の厚味を連ねた皮膚、女から剥離した地面に、瞬間、女の顔のほてった赤味が溶け込んだりする。それはかゆみの信号の瞬きではなく、かゆみは姿をくらませたままだ。女は自分のいまの苦痛とさえ隔絶した孤独を自覚し直さなければならぬ。

目を上げると白い闇が帽子になって女に被さってくる。もうかゆみは絶対来ないという浄化された思いがすうっと女を軽くする。白い手で払ってみると、女の地面の皮膚は襞をつくって上に続いていて、階段になって、皺の線の刻みは鉛筆で書いた横線になって鏡り上がっていく。

女は誰も見ていないのなら肩から水平に両手を上げたまま歩きたい。女は眼だけをちらちらと

動かしながら歩いていき、階段を駆け上り、最後の一段を大きく跳び上がり、その縁にたつて綱渡りをするように手を広げる。

男は口をとがらし、紙袋を体の前で回転させながら歩いてきて、階段の下で、回していた紙袋を左手にぶら下げ、ブレザーのポケットに右手を突っ込むが、紙袋は意外に大きく長く伸びて地面を叩いてしまう。

女は早くも階段を駆け降りてきて口の内側を明るい色にみせ、コートを後ろになびかせ、昇ってくる男とすれ違うが、男は下を見ていて彼女だとは気づかない。

女は振り返ってコートを腰のあたりでつまみあげ、階段を駆け上り、髪をさらさら風に吹流して、ゆっくり紙袋を抱え込もうとする男を見上げる。

「あなたは、ふいに見るとき、わたしを、まるで動物の目で見るのね。じろじろり！」

男はネクタイの結び目を息の詰まるほど絞り、薄色の目をする。ふたりは向かい合ったまま横向きに階段を数段のぼり、立ち止まる。

「あなたは口と別のところで、ものを言ってるけど、今、わたしは魔法のようにすることが変りつづけて、落ち着きを失っているのよ……」

男の乱れた髪は光にまぎれて、半分は真っ白に見え妙に老人じみている。

「行く、行かない、行く、行かない、行く！ だから、バイバイ！」

何処かで無意識に摘んだマーガレットの花びらを一枚ずつむしってばらまいても、女のせかさ

れている方向は逆転しつづける。

女はアイスクリームが唇のあいだに溶けていくかすかな爽やかさを感じるが、すぐそのあと、もう自分の中から滲み出した塩分で喉をからくしてしまう。正面にあるポスターの一字は、女のみをかすめて通り過ぎるが、その字から赤や黒の活字が房になって群がり、幾つかの不可解な意味を持ってまといついて来る。

「ありがたい、あと一息、あなたじゃなく、空き部屋のなか、アマゾン川の夕陽……」

そこに止まって活字の正体を見届けるなら、あつけなく無用の気がかりを払い落とせるのに、女は急いで移動していき、案外いつまでも長続きするとらわれ方をしたりする。

風が乱暴に女の口を押さえてくる。

その気になれば軽く物を飛び越えてしまえる。

ちりちり音の泡をばらまく小型機は滑走路を子犬になって駆けていき、旗は結ばれているヒモがとれて、細いのぼりになって風に吹き流されている。

女は芝生を踏んでいく。

「玄関先で友だちを帰してしまう習慣はないのよ……」

友人がいうのに、女は忘れ物をお返しに來ただけだからすぐ帰るといい、嬉しいことを思い出したようにくると向きを変える。

弓道場で、女は的一のメートルも上に狙いをつけるが胸と耳が弦ではじかれ、右手首が鏡のな

かで猫が首をすくめた形に変貌するから、射る気を失ってしまふ。

奇声がどこからか聞こえてくる。きつと事件が起こったに違いないと、女は動転し、妖怪に追われでもするように騒いで見る。

もう一度メモして、ボールペンで書きなぞる。女は買物物をしなければならぬと自分に命じて、店の前まで来るが、ふるえる目移りで軽く取りやめにして不都合を気にしたくない。電話する予定もまた駆け足で逃げて、次の関わりへ。

後の行動によって前の行動がどうせ矛盾することになる、取り返しのつかないことになるよりは……、上を見る。開ききり、花びらの大部分を落としてシベばかりになった花のように、車輪を開ききつた飛行機の低空飛行だ。

すべてが叫びをあげつつづけているような、空全体をバンバン叩くざわめきのなか、駐車してある車と同じ紺色で、いないに等しい服装の男が上体を前に傾け女に近づいてくる。

「今、上を見て、目を閉じて開いたの。今日は無駄な動きばかりしているのよ、だから、今からを新しい始まりに仕様と思つて慎重に構えたの。あなたは後ろからつけて来たり、前から現れたりする、わたしがどんなに急いでも一つの場所や時間に閉じ込められて、どうにもならないぞと言わんばかりね」

男は顔をそむけ、女を軽侮するように紙袋を上下動させて床を叩いている。袋はさつきより大きく膨らみ中に風が出入りしている。男は肩のあたりを心細そうに下げる。

「そんなにヒザを白くして、なにかの巻き添えを食いたがっていそうに見えるよ！」

「そう、ええ、やむを得ずなの……」

女は力を込め男の額や口をグイと間引く。男の声は喉の何箇所かで曲がった素直には聞けない変わった声だ。歩道には白にチヨコレート色の縞が走っており、女は背を真直ぐに伸ばし、縞の上を伝って、目だけを動かして歩き出す。

男は腕を空に突き通して向き直る。腕を下ろすと空が大きくなっている。男の回りからシャワシャワと小さな空気の泡が並んで動き始め、男の持つ紙袋から書類が吹き出して飛んで、向かい風を避けて振り向く女の顔にピタリはりついてしまう。

女の目には、紙の繊維の網目が文字の赤い色を滲ませているほか、何一つ見えない。息がこごって紙の下で充ち、口の中に逆流する。女は紙を剥ぎとろうとする。

「遮断機のつもり？」

女は、目が見えないから紙を剥ぎ取ろうとする。払い除けなければ……いまこする女の目には何の覆いもない……そうだ、薄っすらと記憶されている、あの時の他とのかかわりは総て剥離し

きつて、女ひとりの宇宙になった外皮との係わり合いにすぎなかった。いまに止まっている過去のあのときは、想起ではなく現実なのだ。女は足下を踏み潰し周囲にぶつかり、衝撃を与えて、外皮の外で紙をばらりと払い落とさなければ……。女は見えない不安で足を地に固定させたまま、持ち上げられない。

裸足のかかとのけちけちした動作、転ばない前に地面にどしんとぶつかってみるが、そこは滑らかな斜面でスキーのように滑降してしまう。目の前のかすかな赤い網目に銀色がごちゃまぜになり、どこか遠い合唱のような、かすれる風の声を聞く。息切れする息もないほど、鼻も口も押さえこまれていく。滑りどまったところで、固いこぶしほどの円錐形の塊につまずき、目の前の薄っすら明るい赤を紫にかえてしまう。

女はその塊をつかみとろうとする。目がみえないから、ふれた塊を測量点を見つけてもしたように、自分の支えにして掴まる。それは動かそうとすると地面全体の核であるかのように重く、根をもっていて得体の知れない動きをする。押ししても引いても駄目、引っ張り上げると大きな拳になって動き、そりかえり、皺を重なり合わせて皮膚の波を八方に這わせる。

女の目には、紙を通して炎の広がりのように赤く、次には激しく反り返えった白の輝きがきて、からりと晴れ上がった真っ白い世界にいる。女は顔に巻きついた紙を、どうやら振り落としたらしい。円錐形はいつかの釣り針の傷痕で、彼女から見事にはなれて外皮に根を張っている。女は腕にあったはずのその傷あとを見るが奇跡のように消え去っている。女は腕と傷痕のどちらかか

ら血が流れるのを待ってみる。

女は待ちかね、自分の心臓の弁のわきで、さつき送り出した血液がもう一度戻ってくるのを待ち受ける。

血液でさえ、体の中で過ぎていくものばかり速くなって、どれ一つ女の手によって繰られてはいない。近くにある皮膚のふくらみに腰をおろす、生暖かい椅子だ。

男は椅子に腰掛けている。

「母は初対面の方を前にすると、何時もまるでせつぱつまったみたいに、忘れていることを思い出そうとするのよ」

女が小声で注意するから、男も小声で頷き、聞き直される。

「そう言う話し方は不快ですよ、非難されているような？」

「お母さんの握手は、お陽さまだつて角砂糖にするほどの力の込めかただから、手を切断するはめになるわよつて。彼に忠告したところよ！」

「娘は隅におけませんのよ。トラブルを起こすのがうまい舌を持っていますから。自分だけじゃ

なく、若い女の子はみんなそうだななどと言って、一日に平均一人の友だちと絶交するようですわ。勿論それが軽はずみなことではなく、熟慮した上のことだそうで……」

女は顔をしかめる。

「それでも絶交の翌日には、みんな、わたしと親しいと言う顔で微笑んできて、多少足をゆるめ、ためらって、わたしに反応がないとわかると、脅されでもしたみたいに逃げていくわ」

「この間までは、馬鹿なことをと叱っていましたが、今は娘と一緒に楽しんでいるんです。娘に対する期待の皮が一枚むけてしまい、どこかいびつになり、我が家もこんな少々なりふりかまわない無邪気な暮らしで活気づいているんですよ」

男は女たちを正視出来ずに慌てている。

「母子であなたに値札をつけようだなんて、そんな気持ちはありませんのよ。だから、脅えることとはないわ。若い方は私の目から見れば去勢されたみたいに、みんな可愛く見えますもの……」

「本当は、誰でもかまわないのよ。この偽物の母は、母の友だちのように、娘の恋人を共通の恋人であるみたいに、声高に話してみたいのね。ただ三十にもなった男の人は大人すぎていけない、楽しくないから御免こうむるんですって！」

母娘の微笑は不自然にみえ、女はボーイフレンドを紹介するという極度の緊張から、飲みものでむせ返り、母親に乱暴に背を叩かれる。

「女世帯の一日一日はおかしくなるほど、ちよびちよびし過ぎていますもの……なんとというか、

こう、もっと大きな……」

男はちゅうちよするのに疲れた手を紅茶茶碗の上におき、肩で息をし、レモンの皮まで味わうはめになる。

「あのととき、海岸の藻の繁りで、瀕死の鯖が白い腹を見せて立ち上がり、波の間に間に、尾をくねらせていました。魚さえ、何かに追い立てられてか、急いで歩いていました！」

「あのとときって？ 何のお話？ いいえ、うん、はい、以外の言葉は忘れてしまったのかと思ったら……、おかしな話をするんだから。母の話なんか聞いていなかったんでしょう！ いつか、あなたは、耳が折られたまわっていて、誰かに広げてもらわなければ聞くことはできそうもない、なんて言ってたけど、ほんとね。こんな時に、わざと、まるで見当違いの話をしてみせるんだから！」

女は赤い椅子に腰かけているが、一分後には歩き出すために、下に重みを一つも落とさないうまわり方をしている。

「バイバイ！ 本当に落ち着いてお話のできるとき、また、いつか！」

女が急に忙しく立ち上がるから、男は慌てて紙袋を抱え込む。

「娘の舌は浮き上がって、言葉がパクパクしていますけど、パクパクして立ち上がるお魚は釣り上げられたくて歩くのでしょうか？」

母親は冗談のように言って、開き始めている植木鉢の花の数を数えた後、気づまりそうに、瞼

をあげる。女は母をにらむ。

「これって、そう言う通じ方をするお話だったの？　大抵の魚は釣針の餌になんて寄っていかないわ」

男は向き直り、ぎこちなく口を開く。

「僕の見た魚は藻のなかにくぐり込み、藻に巻きつかれて、みんな消えてしまいました……」

女は腰をおろしていると、無力で両手の指さえ十方に広がりそう。足を組んで、皮膚のふくらみに腰をおろしている、生温かい椅子だ。円錐形の傷痕から遠ざかる、それが測量点であるかのよう遠ざかった分を振り向いてはその距離について考える。

そこから遠ざかるほど、彼女自身がそこに向かって流れ出していくのを感じる。

まるで家出をした家出のしそこないのよう振り向く。家出は後ろめたいことでもなんでもない、孤児が後ろめたいものでもないように……。

剥離した外皮の女だけの宇宙へ、こんなかたちの家出の仕方があったのだらうか……女は円錐形の傷痕を振り向いて、離れることが家から離れるように気がかりになり、思いがけなく心が痛

んで腕の傷痕のあった場所がずきずきしてくる。

潮の香りはかすかにガソリン臭をただよわせて遠ざかっていき、十字架を立体化したようなテトラポットは銀色の網をかけられて釣り上げられる。

作業船がガクンと飛び上がるとテトラポットは落ちていく。女と男は岩間から、藻の粘りで泡がふわふわ飛んでいる場所にいるが、膝までイカのぬめりのような湿気で蔽われてしまう。真向こうの岩島に海鵜が、ペンギンの群のように棒立ちになって彼女たちを見物している。鵜は人信じない顔付き。

「鵜さん、わたし達以外の人間は、ただの一人も、この世に存在しないのよ。しなくなったのよ！」
女は鵜をだましてみる。釣竿を引き上げようとすると、クックッ釣り糸の先が戸惑った上下動をし、引き上げられるのは黒いメジナだ。慌てふためくと、ビューンと飛行し釣り針だけになって、魚の身替りに釣り上げられているのは女自身だ。釣り針は右腕に深々とささり、抜こうとすると抉られるように痛い。

「動くんじやない、肉に食い込んでいるから、抜き方によっては傷をでかくし、肉がごっそり抜け落ちてしまうよ。動くんじやない！」

男は女に身じろぎ一つさせない、怖さを表情に浮かべることさえ禁じて、まるで氷柱のなかに閉じ込めようとする。

女は泣き、涙を風にさらして乾くのを待つ間、睫毛に百もの白い帆をみる。

釣り針は腕の中でミキサの刃のように回転し、血を泡立たせ、激痛さえ砕いて鈍痛に変えてしまう。女は腕から目を背け続ける。女が岩に掛けておいたコートのそばに少女が立ち、次に見ると、少女は大きいコートを着て笑い出し、すぐに小さい体を縮めて、恐怖の表情に変わってみせる。女をかすめて少女は逃げていく。胸の悪くなるほどの素早さ。痛みは光になって動悸と一緒に飛び出し途絶えそうもない。腕をもんでも、痛みをなくす役には立ちはしない。円錐形の塊になって剥離したあの傷痕に痛みのあるとわかっていて、女は何回となく振り返る。飛んで戻ったところで、あの塊に衝突し、頭を割って気絶するよりほか痛みを癒す術はない。

いま痛さに耐えかねて、奇妙な弧のひとつ飛びで戻ろうとして思いとどまる。痛さに向かつて切羽詰ってくる気力で手を開き、水平に伸ばして短い飛翔をする。

片腕は火がもえて、両手が苦しんで、もう苦しさで死んで軟らかくなって落ちる。死が全身に及んで、もうすぐ倒れそう。女は白い山脈の尾根を伝い歩いて、少し降り、倒れかかり、山腹の白いベツドのかたわらに来る。

白いベツドがあり、病人がいる。

「お母さんに内緒で会いに来てくれたのか？」

「見えるんですか？ 眩しそうですね、わかるんですか？ わたしが？」

「わかるかって？ わからんね、この手術が妥当であったかどうか、確かめるために切り取った胃袋を見たいんだが、見せてくれないんだよ。胃は俺の所有物だとは思わんかね、俺の欲望の根

「源は胃袋で、俺は欲望そのもので生きていたようなものだよ、昔から胃袋は俺だったんだ。あの医師は……おまえは知らないだろうが……あの医師は身のあかしを立てられないようなへまをやつたらしいよ。へまで俺の体を片輪にしたんだ。許されることだろうか、どう思う？」

病人は喉を押し広げ、覚めていながらイビキをたてて、少しかれた声になる。

「一体胃袋は何処でどう処分されてしまったのだろうか？　どんな動物が食べてくれたのか気がかりなんだ。俺を消化したその動物の様子を、是非、一度逢つてこの目で見たい……」

「そんなこと言つて、ガンなんか、ガンなんか、犬もくわないでしょう！」

女はひよいと言つて、口を開いたまま……表情をこわばらせて棒立ちになる。

「例えばの話なんです。どんな病気もあるでしょう。人間が犬なんかに食べられてたまるもんじやない。消毒の方法もあるけど……薬が悪く……つまり、煮ても焼いても……つまり……」

意味にならない……途方もない残酷と屈辱を与えている。言葉が声にならない。女は注射針で青くぼろぼろになった父と称する人の柔らかい手を押さえて、その視線をくぐり抜け、くぐり抜け、あやふやに首を回して外を見る。

大量の風を貯め込んでいるに違いない雲は、黄色い輝きを浴びて象の巨体に似た分厚い量感をもっている。病室の窓から射撃演習場が見え、山際に並んだ標的に向かって重い装備の少年兵がノソリノソリ這い進む。

「撃ち方用意！」

振られる前に風に振り切れている旗、幾発か命中しているらしい。

女は首筋にからまつてくる父と称する人の視線をさけ、額の真中に乗り上げてしまう。眩暈がすぎ、その黄みがかつた額を行ったり来たりする、煙たい笑いを見つける。

女はこのひとの全部に見覚えがない。

「わたしは、お母さんの唾なのよ、天に向かつて吐き出されたものか、地に向かつて吐き出されたものか、知っているとおっしゃるなら、言ってみて欲しい。でも、知っている筈がないわ。だからわたしはどんな言葉だつて自覚なしに軽々と口にすることができるのでよ。不在の人に言つて上げるように、なにしろ言い方は好き勝手なんだから。誰の命令もわたしの障害にならないんだから……」

女は唇を動かしながら言うことを次々呑み込み、後退し、もつと窓に近づいて、ぴつたりガラスに額を押しつける。自然でなだらかな山が見え、なめらかな空が見える。

「晴れて、呑めるつてわけだろうね……ウイスキーがあつたんだが……その……」

女はぎくつと身を引く。父と称する人物の手は、べたべたした紫色で、点滴の注射針をはずして、床にてんとんと血を落としつづけ、赤黒い血だまりを作っている。生々しく匂い、干上がることのなさそうな血だまり。床で血は沸騰したように泡立ち、まわりに吹きこぼれ、面積を広げ、鈍い色の輪をひろげる。その人物の青い血管地図が、額に庇になって浮き立ち、眉が乱れている。その体に掛けてある毛布に見えていた薄っぺらな膨らみさえ、くぼんで引つ込み、反対に穴にな

つてしまう。

シートに散った血液は大分時間を経過した後の殺人現場のように、洗っても決して落ちることがないぞという恨みを込めて、奇妙に黒々している。女は手も服も血液にまみれて自分から流れ出ている血であるかのように泣き出し、涙を透かして血だまりをもっと泡立たせる。血の泡は跳ね回る点々になって、女の体中に痛みをばらまきヒリヒリと全身を冒してくる。女は体をたわめてドアによりかかる。

寄りかかったドアが開くと、白い皮膚の中の宇宙だ。過去の現在化した今でなく、本当の今、よく考えてみれば、皮膚を剥離されたことが原因で癒えないヒリヒリする痛みを襲われているかもしれない。

女は、皮をむかれて蒲の穂に転がる白兔のように、地面の皮膚に微かにたまった皮膚の粉を、まぶす試みをする。女は山から落下する小石になって転げ、寝ぼけた鳥のような声をあげて、地面の皮膚のささくれの上を通り過ぎ、指紋めいた渦の真中で回転し、危なっかしげなバウンドをする。転げ回りつづけるうち、車で運ばれていくと言う楽々な印象を抱く。転げて、目印を見届けておかないから、このドライブ、同じあたりを転げ回っているにすぎないのかもしれない。女は体から湯気をあげ、ぐったりと皮膚の壁に寄りかかって立ち、壁を重荷のように背負い込む。

女の母はドアにもたれかかるように立って、男の持っている袋を指さしている。

「大切そうにしていらっしやるけど、それは一体何のですの？」

母は興味を引くものの正体をつかもうという熱狂で、顔をきらきらさせる。

「わたしは、赤旗だろうと思えますけど……」

男は袋の口を折り込みながら体の後ろに回して、目覚めたばかりのような艶のない臉をこする。

「風呂敷です。ずっと昔、大伯父が使っていたものを、僕が一寸使っているだけです」

母はまるで匂いを嗅いでわかるというように鼻先を下げ、鼻の蔭から物を見ると言う顎の引きつけ方で、男を見据える。

「風呂敷などという実用品にこんな古びた匂いが付きまとうものかしら？」

「そんなに好奇心を駆り立てないで下さい。これに包んで古本を売ってきたところなんです」

男は袋の中のものを読み詰められる謂われなど、ないと言うように、女に助けを求めて部屋の中を一巡りする。

「これは、本が包まれて物置に投げ込んであった風呂敷で、ありふれたものなんだ。汚れて古びて大きいというほか、そう特殊な物じゃないんだよ」

男は畳まれて赤一色に見える布を両手で握り締め、古くさい臭気を搾り出す仕種をしてまた袋

に突っ込み、外に出ようとしますが、ドアは女の背で閉じられている。

女は遠くを見ている。窓の外はぎらついているものばかり、油の浮いた河面、停滞している車、飛行機、燃料タンク、それでも太陽は片側を黒い雲に食われて、気づまりな感じを濃くし、誰かの飛ばしたテープが直立したまま、しずしずと一直線に風下に動いていく。

「なら、ほんとのことを言いましょか。実はこれ、変な風呂敷なんです。国旗の白地の部分に墨汁で文字というか、文というか、書いたもので、伯父が兵隊のころ持っていたものだけど、旗だったことなど一度もなかったんですよ。はじめから風呂敷だったそうで……」

女は男から袋を受け取り、赤い布を引っ張り出して素早く母に渡してしまう。

母の蒼白い手が布の折り目をくぐり、手はくらくら失神してしまいそうな虚弱な女の顔になって、布の襞の中に倒れこんで止まる。血に染まった縮れ毛のようにややさめた赤が、その手の甲を取り囲んでいるが、指は赤い部分を払い除けて、白地ににじんだ墨の色を指してすくんでいる。

女が椅子のほんの一部に腰をおいて少し傾くと、母の脇で物が落ちる。

「赤旗が悪いと申し上げているのではなく、面白そうだと思ったから、つい……この書は……」

母の指は、布の上に影を落として、空で筆跡を真似る。小指をはねた手つきで字の部分をつまみあげる。

「大伯父様のひつぎはこれで包まれたのね。激戦があったし、長い行進もあったし、真っ黒い空があっても、それが空の地色ではなく、無数の亡霊で埋め尽くされていたのよ」

女は母よりも、もっと小指をはねあげて、熱に浮かされたように母の手を掴み、母をあやつるように黒い文字をつまみあげ、テーブルの上に並べつづける。男は不器用に後退する。黒い字の列に、母娘は互いに顔を覗き込んで溜息をする。

「喉が渴いたわ」

「旗の中のことですよ」

母は女を押しつけ、赤い丸を囲んで横向きになる文字を縦にするため、布を持った手を持ち替えずに回し、かざす腕の間から読み取ろうとする。

「こんな布の中ではどんな手品だって出来ますよ」

女は両開きのガラス戸を締める。

暗いどしゃぶりがやってくる。雨に痛めつけられ、すがりつく服の力に両腕や肩や背をつかまれ、とぼとぼと少女が歩いてくる。

ガラスの柱のような晴れ間がどしゃぶりに囲まれて移動してくるのが見える。

「つまりこれは、あの人の旗なのよ」

女は母に無頓着にいう。

「でも、母には商才があるのよ」

女は男を振り返る。

男は自分を抱くように小さくなり、膝が胃にあたるほど曲げて、弱い動物が強い動物に見つめ

られ、しわがれた叫びをあげる寸前を想像させる。

女は男に指示を与え、部屋の模様替えをはじめ、椅子やテーブルを移動させる男の足許を、掃除機であおりたて、重いものを持ち上げさせたまま長い足踏みをさせる。母は旗を抱え込み、角を足で踏むほど垂らして移動しつづけ息切れしている。

女はそれが遊びであったみたいに、掃除を突然打っちゃってしまふ。

もう外は雨が晴れて、景色の低いところどころに温泉そっくりの湯気があがっている。

「アイロンで伸ばさなければなりませんわ。皺だらけですもの」

母は旗を手早く畳みはじめる。うまくいかず、舌打ちをし、生きものを押さえ込むように、畳むそばから、旗は空気をはらむから、全身をつかい気取った身振りをすて、四つん這いに近い姿勢で、もう十分も活発な動作をしている。もはや畳み終わる時が母には来そうもない。

男の二つの眼は全く静かだ。女の唇は糊ではりつけになり、唇のほかにも、どこかがはりつけになっている。口の下に、ちようどご飯粒一粒ついたような感触があり、触ってみるが、なにもない。白い粒は女を白い宇宙の壁に貼りつけているのだ、女は壁からはなれる。

ご飯粒ほどの感触も離れる。

「おおー！」

女は出口に近づいているのだ、この宇宙の地理がわかってくる。確かにそこに凍結湖の神渡りのような山脈が走っている。あの谷間が、この外皮から外へ飛び出す出口になるだろう。

女は歓声をあげ、足音もたてずに、皮のたわまないうちに斜めに突っ走り一氣に上にいるが、あげたはずの歓声は何処からも聞こえず、谷間はなく皮膚はひと続きに向うに連なってまた山になる。唇はのりづけされたように貼りついたまま地面に墮ち込み、風を吹き出す死火山の火口もなく岩石めいたとげがあるだけ、火山だった面影はどこにもない。

女にはもう、粘ついた唇を動かして見る必要もよそに移動する必要もない。

女は自分が誰かわかったものじゃないと思う。一人でいることは怪しげなもの、自分でないくらい妖しげなもの、死んで遠のいていた物でも、生き返らせて招きよせる術がつかえる。天の果て、地の果ての皮膚の全部が、怪しげな一人ぼっちに走りよって、女の宇宙の全部を押しつぶしてしまおう。もう二度と、女一人の宇宙が現れるはずがない。怪しげなものなど、この世の誰にも必要ではないのだから……。

男の部屋からはみ出した本が階段の両側に乱雑に積み重ねてある。男は女の後ろから女の両脇で手を広げ、本の崩れを防ぎながら階段をのぼろうとする。

「すごいだろう！　ときどき雪崩れになって落ちるんだよ。家主は雪崩れ一回について幾らかづ

つ戴くことにしたいと言っているんだ、がめついだろう、あの家主のやつ！」

男が話しかけるから、女は勢いよく振り向き、腰で本を押し崩し崩し男も巻き添えにして、すさまじい響きを立てて落ち、本と混じり合ってしまう。女は足や腹を本と打撲で蔽い、男に腰をつかまえられ本と溶解した共有の感覚をもち、唇の上に載っている本に息を吹きかけて、もはや自分ひとりで身動きできるはずなどないという諦めに陥る。

腰にある男の手を離すと女の手は宙に浮く。女は臉に埃をおいて詰まった声になる。風が吹きつゝのときに似た時間の摩擦で、話が頻繁になるほど声は混じり合ってしまう。

そこはまだ階段で衝撃でゆるんだのか階段がぐさぐさする。本はまだ階段の下へと共同溝をすべるように落ちていく。男が体にかぶさった本を払い落として起き上がると、女の背で固い本が口を開き背の肉をはさむ、腿の肉も本の間に挟み撃ちに合っている。女の顔と向かい合っている本も、女の鼻をつまみあげる。

「そうやって本の下にいたら、きみ！ 塩ジャケみたいになっちゃおうぞ！ まったく、オーバーに振り向くんだから……」

男の手はスローモーションのように本を一二冊階段の隅に重ねて置いてから、女をゆっくり抱き起こす。男は女を部屋に運び上げ、女の上を跳んで、彼女のいる場所をつくるために本を更に高々と積み上げる。女は狭い所で両側から腕を切り落とされたコケシの形になって、飛び飛びの息をつく。

「本のジャングルだよ。大伯父の遺産だから仕方ないさ。じたばたしてもはじまらないんだ！」
本は無気力な半睡状態のとろんとした老人そのものだ。手をとり足をとり、肩をつかみ上げてやらなければ決して体を起こすことも動かすこともできない、口もきけない。老人そっくりの臭気さえもっているのだ。男はねずみ色に乾ききり、伸びきった百歳の老人の皮膚のような頁を繰っていく。男は指がにぶくなって、二枚一緒にめくったり、あるいは手で触ってみるだけで目を頁に落とさないでめくることもある、何十年前かの蚊がしおりになっている。払い落とす場所をさがすが、思い直して頁をえらび、再びいいねいにしおりにする。

「三日に一度は見終わって確認した分だけ、風呂敷に包んで売ってくるんだよ」

「毎日しなければ駄目！ 早くわたしのために楽に座れる場所をつくってよ。あなたはあんなに孤児であることを誇っていたのに、遺産だ遺書だなんて、どうしてそんなことに夢中になっているの？ いままで本に期待することなど一度もなかったのに……」

「どの本にも随分書き込みがあってね、判読困難な書体だから、弱ってしまっただよ」

「わたしは古本と付き合うほど閑人じゃないわ。遺書が見つかったら、どんな物語が始まるというの？」

男は手袋をはめたように埃で灰色の手をし、ちびた鉛筆で何かを書き込んでいる。

「あなたそのうち、液体になって、本の中に流れ込んでいってしまいそうね。何かを書き込んでりしているなんて、目的と違って何だか怪しい！ 何時も本を売りに行ってるのではなく、本を

買い込んで来ているんじゃないの？ コンテナに半分位しかなかった本がいくら狭くても、階段にまで積み重ねなければならぬほど多いはずがないじゃない！ あなたの未来は何処にあるのよ？」

男は本に腰を掛けて、掻き回したように置かれていた数冊の本の上に足を乗せる。

「僕は機械じゃないから、吸い込まれるように読んでしまい、本の世界に入り込んでしまう場合もあるし、関連した別の本も見たくなれば、買い込んでくることだってあるさ」

「ああ、やったあ！ その本に今、鉛筆で何か書き込んだわね。それ、読んでみて！」

「これをか？ きみのママも、きみも、興味しんしんなんだから、全く。ご期待にそえなくて悪いけど、そんな面白いものじゃないよ。考えてもご覧！ 先祖代々落書き好きな遺伝のある一族が、決して落書きを消さないで置く場合、その家のトイレの壁がどんなになるか？ 見たいなら見てご覧！ ここにある文学書も科学書もエロチックな文書に早や変わりするかもしれない。なに、声をあげて読んでみてかまわないけど。きみも読んでみれば、わかってくるさ」

女は体を細くしたまま、一冊も本を開いてみようとはしない。部屋に立ち込めた埃で、しゃっくりが出てきて、彼女の見る男は、手だけだったり、首だったり、足だったり、震えて狙いが定まらない。しゃっくりはいま、女の体から離脱していく靈気みたいなもので、それに縋りついていこうとする体がとぎれとぎれに騒ぐらしい。

「窮屈かもしれないけど、僕がきみを見守ってあげられる範囲は、ちょうど、その位置のその狭

さしかないんだ。後で、様子を見て効果的に驚かせてあげるよ」

「びっくり、するより、この、まん、ま、が、い、い、か、ら、……」

女の吐く短い言葉は、息のかたまりに包まれて、ぼっぼっとはじき出される。

男はちよつと息をいれ、エンピツを耳にはさみ、踏んでいる本一冊を足の間に立て、肘をあげて本をばらばらめくる。

「僕の父の家が破産したのは、本屋の借金が全財産の何倍もあったからだそうだよ」

女は自分の喉が鳥になったような思いで、体の中から言葉を取り出す方法を迷ってまごついている。

男は思い切って、旗の風呂敷を本の上がいい加減な広げ方で置き、百冊ほどの本を重ねて包み込み始める。包みは持ち上げると、本の下で畳まれていた襷が伸びてぐさぐさになり、本の間の細道から階段の坂道を崩れを起こしながら運び出される。

包みを庭のすみにどざりと置くと本を取り出し、表紙をバリバリはぎとり、中身も三つ四つに裂き、交互に薪のように積んで点火する。炎は本の縁を這い、たちまち一頁一頁が山岳の模型のようまでこぼこを見せ、一冊一冊がまんまるになってボールが転がるように四方八方、庭中いっぱい火の粉をばらまいて暴れまわり、一つは床下に入り込んでオレンジ色の炎を吐き出し、早くも土台をなめはじめめる。

家主が驚いて飛んでくる、女は悲鳴をあげる。

「効果的に、脅して、くれるって、このこと、だったの？」

男が瞬きをくりかえし、腕を伸ばしきってから、指揮者みたいに大げさに振りかぶり、交叉させて振り降ろしても、女のしゃっくりはまだ排泄されきってはいない。

女はしゃっくりで薄紅色に上気し目なじりを熱っぽくしている。

皮膚のなかの宇宙で、一つしゃっくりするたびに何か大事件がおきる。またも一つ。目を開ききったままオレンジ色の炎に追われて、本を読んだ罪を負った白い亡霊たちが飛び込んでくる、もう一つ。料理人がフライパンをポンとあやつるように、そば屋の出前が曲がり角でバランスをとるような、誇張した傾き方や、飛び跳ね方を、この皮膚の宇宙全体がやって見せるから、女ははらはらし息を押さえこもうとする。さかさに落ちて、ひっくり返っても、衝突して傷つける何ものもない。女は亡霊にうっちゃられたようにいて、魂だけみたいに無傷。女の剥がれたばかりの表皮にぶつかったら、生きている証拠として血を流さなければならぬ……。

暴力なしの馴れ合いの宇宙だというのは意気沮喪してしまう、女は赤く輝いている点が欲しいのだ、自分の場所に目印を描くために。

女は指が擦り減って血の滲むまで、見えているもの全部に触り、線をひき、点を打つことを試みる。ここに……ここからずーと離れたところにも、二つの赤い印があるなら、女はそれを新しい友人を見つけてもしたように、二点を往復し話し掛けつづけるに違いない。色彩があれば、少

なくともそれは無関心ではない生命なのだもの。あたりは死の白ばかり。

帰らなければ……どこからきたのか、動き始めた起点など、何時だって分かったことがなかった、成り行きが変わりつつづけて、捻りまわされているのは女の方なのだ。

なじみ深い片隅の優しさへ戻る。ここを離れて行くことがそこへ戻ることになる。何時だってその中にいた自分の宇宙の外へ旅立つことが……。

女は出発する。小雨の中、がやがやと人の声が集まってくる、女は縮んでいる。ほいほい調子のよいおしゃべりは素通りしていき、落ちたハンカチ一枚ぬれ残る。

車道は青信号だけが明滅し、歩行者用の信号は赤がつきっぱなし、高速の車の間を、女は笛のような声を上げて突っ切る。ぱっと逆さに立ち上がってホウキになった傘が子供の頭を打撃している。物と人の秩序が崩れているのだ。

女が見えているものを信じて目を上げれば、夜見ると欠け字だらけで意味の通じなかったネオサンサインが、いまは昼の光にぬれて文字をかつきり整えている。

木の枝に黄色い実が一つ実っており、少年と少女が代わる代わるもぎ取ろうと枝の間で斜視に

なり、下唇を突き出し、手を精一杯伸ばしている。よく見れば、その実は上手にむかれて実っているように偽装している風の運んだ果実の皮。風は、花粉を運ばず手回しよく、開花、受粉、結実、収穫、食卓、その過程の全部をはぶいて、いきなり皮にしてしまう。

「ほんとはゴミ箱に入っているものなんだよ、汚いのよ」

「木はウソなの？」

「食べちゃったのは、この女の子なんだから、この子は妹なの。こんな顔おかしいと思うでしょう！ 妹が大人をからかっていると思う？ ずっと前のことだったんだ、ぼくが妹に言葉を教えていたの。おとこ、おんなってね、それで、おとこ、おんな、って妹も言ったの。つぎに、おとこおんな、おとこおんなといって、妹もそういって、もっと早口に、おとこおんなおとこおんな……とつづけたら、妹もおんなじにいつて、それからくりかえして、妹ひとりで、もうものすごく早口になって、口から泡をとばして、どうしても止まなくなっちゃった。おとこおんなおとこおんなおとこおんなおとこおんな……しまいに熱が出ってしまったの。それからなんです、頭がおかしくなって、口がきけなくなつて、バカだつてひとが言うの。うそじゃない、ほんとき、なんなら、しゃしんを持ってきて見せようか。ずつといぜん、ものすごくお利口だったつてこと、よくわかつちやうと思うよ」

少年はその話を女に理解させようと、ぴったり身を寄せる。

少女は大きなおでこの下に、まんまるな口を開け、小雨に手を上げて祝っている。

「よかったのよ、きつと。面白いものが聞こえるのよ、きれいなものが見えるのよ！」

女は少女と握手する。女は熱くなった涙の目をこすり、霧雨を通して見直すが、子供たちはすばしっこく逃げていって、もうそこにはいない。

おとおんな、おとおんな……いつかどこかで会った少女に似ている。好奇心をもって、好奇心から逃げて、自分が自分にはぐらかされる。

女はピエロのような化粧をして、奇妙な袋を着ている人間になつて、濡れた路面にいる。小雨のなか、袋で浮きながら灰色の海にただよう首のように、どこに行くのかわからない。

女の行くところは、光沢のない無数の三角の筋に囲まれた白い宇宙のなかだ。宇宙の外に、宇宙はなく、宇宙の全部が女に与えられている。しかし女は何ひとつ自分に割り当てることができずに青ざめている。

「なにもかも欠けていて取り得のない宇宙など欲しくないわ」
女はつぶやく。

わたしはこの世のはじまりのあしかびのようにいる。女神になつて、右目から太陽、左目から月、鼻から海を生むことが出来るなら……女は途方もない大息をついて肉体をひきのばす、なんとなく体のなかに、太陽や海でなしに、剥離していった皮膚そっくりの同じ大きさの宇宙を内臓しているような空虚な感覚がある。とすると……内と外に二重の巨大な皮膚の宇宙をおいて、そ

の間にはさまれているわたしは存在を否定しなければならなくなる。わたしのいなくなる前駆現象か、白夜と白昼がひとつづきに過ぎ、日付けのない毎日が消化される。宇宙がたわむ、女の皮膚の宇宙は外と内で存在を主張して闘いをたくらみ、一つの皮膚の宇宙はなぐり合いをはじめ。山が閉じ、谷がひらき、ぐんぐん近づいてくる、女の方からも近づいていく、宇宙は若返ったように柔らかく弾力性をもって、ゆたりゆたりとし、やがてぐらりと攻守の様相をかえる。女は必死になって波を押し返し、踏みしめるが、立ち上がった皮膚の岩に座礁し、同時に裏側の皮膚の波頭と波頭の間で呑まれてしまう。

積み上げられている本が両側から女をはさんで倒れてきて、女を閉じ込めてしまう。男は一抱えの本を、古本屋に売るために運んでいったから、女は一人で本の重みを跳ねのけるために、体を左右に動かし、崩れをその重りのまま立て直そうとするが、下から斜めに角を突き出している本があつて、思うようにはならない。もと通りにはならないが、なんとかやつと居場所を確保した女は、崩れている本の重りの下に、うるし塗りの蒔絵の古めかしい小箱をみつめる。

開けようとするが、真ちゅうの留め金がひんまがつて蓋がとれない。こじあけようとしても動

かず、固い本を持ってガンと力一杯叩いてみる、それでも開かない。あきらめて肩に倒れかかる本を体全体で押し付けながらぼんやりすると……コツキン……箱のなかで音がして、何時の間にか蓋がふわついている。赤インク、青インク、朱肉が点々と皮表紙を汚している日記が数冊ある。誰のものか名もしるされていないカンナクズのような太い筆跡の古い日記だ。

S 16×月×日

自分で自分を語る話し方の研究。狸肉二百匁買った。食す。物は試しである。何だか気持ちが悪かったが、これも薬、睡眠薬とか風邪薬とか、栄養とか、国策的立場とかいう立場から食べたなら、そんな贅沢はいつて居られぬ筈である。

S 16×月×日

今こそ真の世論の時代である。創造的愛国的議論ならば、何ぞ誰かこれを阻まん。決死的国士を誰かこれを阻まん。各自の生活状態について意見を発表することは下情上達の道である。

S 16×月×日

狸公の肉、強力なる臭気にこりて全部捨てた。彼は狸皮の宣伝員であった、夢油断は相なりませぬぞ。

S 16×月×日

冒険だ、度胸だ、肝っ玉だ、橋は叩くべし、渡るべし。

常勝双葉山も変幻自在の妙手を創造する泉が涸れたので時々不覚をとるのだ。意表電撃戦術こそは、行き詰まりを打開するものである。何と相撲通多きことよ。

5 16×月×日

写真がきた、ああ、我、何と皺苦茶面となったことよ。これぞ思索思念の構築である。尊き彫像だ。この上は凄味と迫力が生まれてこなければならぬ。

一体何者？ 女はこれを書いた人物が、彼の何であり、どんな生活をした人物であるかの確証をつかむために、判読難の書体と内容に首をかしげ、文字をとばし、推理し、終わりの頁に目を走らせる。

5 16×月×日

錯覚による妄動遺憾。これには特別思うところあり、この日を抹殺する。

5 16×月×日

機の哲学の実践か。世界啞然、驚異、驚嘆、火の英雄ヒットラー。千年平和計画のテーマ発明者……。

5 16×月×日

不快の一日を送る。薬大量に飲み過ぎ意外の失敗なす。薬物等注意が必要、薬より養生か。闘

病精神挫けたか……もう一度復活せねばならぬ。

5 16×月×日

車中感想、如何に現代女性なる者が、時勢について認識浅薄にして趣味性を欠き、物に対する徹底的深想を欠くか。栄養豊富の果物皮、実、車窓より大量に投げ捨てるを見る。

5 16×月×日

戦力となるべく、努力すべきときが来た、が、デカンショで半年暮らすということもある。人間、理性的であり、非理性的だ。それなるが故に、生死を超越せる無欲生活人がここにある。

全治快癒、薬物の力を信ぜよ。

5 16×月×日

今こそ真のデモクラシーを。心の燃焼せる真の報国的挺身の義人的な志士的なデモクラシーが血を以って完成されなければならない。摩擦相克を恐れ、姑息的とう安的であつてはならない。

5 16×月×日

あれが地獄名物動物園、カマボコの立ち泳ぎじゃ、さてこっちはカメはカメでもカメの子タワシじゃ……サンマの干物、ワシのメザシ……。インクもこぼれるインチキ者めが。

5 16×月×日

勝利は信念にあるか、祈るとは何か。戦わずして勝つ便利な方法ならば……。眠れ眠れ、眠ることならでできる、他に方法を持たぬのだ。万年筆を忘ればしなかつたか、ポケットに穴ありて気

づかざりし。

読めそうなどころを、いい加減な拾い読みをするために、数日分の日記で、一冊の終わりまで目を通してしまふ。女は白い服を灰色にして、帰ってきた男を見上げる。

「この日記、親、子、兄弟、孫、友……なんにも登場してこない、大げさな孤独の日記なの。この人一体、何を抹殺したのかしら？」

「僕はまだ見ていないんだよ……」

男は手馴れたやり方で本の崩れを手早く直し終わり、狭い場所なのにゆったりと大きな動作で割り込んでくる。

「死者が、後に残る仮面として書いたものを残す、自分を永久にごまかすために日記をしるして、どうせ、時代に騙されていたんだろうし、昔のことなんか意味が通じっこないさ！」

男はそういいながらも本をめくり、書き込んである文字に目を通しはじめる。女は穴の底に埋もれる形で、言うことと、していることがまるつきり違う男を見つめる。

「あなたは、あなたの先祖の亡霊に取り憑かれたみたいに、そうしているのね。わたしにも、なんだか分かってきたわ。人間界という倉庫の出入りは、後入先出であるべきなのよ。老人から消えるのではなく、若い人から消えるべきなの。若い人はそうそう呪いを書き残したりはしないもの……老人は死ぬとき色んなものを残し過ぎるわ。死ぬたびに宇宙を丸焼きにしなればだめ！

これでは、あなたの現在も未来も彼らに乗っ取られてしまうじゃない！」

女は皮膚のくぼみに胎児のようにいる。ここに住み着き、一度も脱出してみたことなくいて、自然で快適だった女の外皮は、何時だつて剥いで離せばどんな遠くにも放つことの出来る仮面だったのだ。仮面に隠れて一つの影のように寄りそつてきて、いま仮面の分泌物めいてしまったわたしは、天地に向かつて仮面をインチキ呼ばわりする。

「声がでないじゃないか！　しゃべりたくないの？　日焼けさえ白茶けちやつたじゃないの！　わたしが操つてあげなければ、指を抜かれた指人形よりだらしがないんだから。一体どつちを向いているつもり？」

わたしは昂ぶつて頭を仰向けにして叫ぶ。この宇宙のなかで泥で出来ているのは言葉だけのはず、もっとひどい汚れた言葉を思いつかなければ……。わたしは思いついて、口にする前に自分の方から屈辱にまみれて、口をつぐむという誤算をおかす。想像できる一番醜い仮面を言葉で捏ね上げ思い切り憎んで見ようとするが、首とこめかみを膨らませるばかりだ。

「開け、ごま！」

わたしは仮面の目や口を開くおまじないが思いだせない。

女は宇宙になってしまった仮面のなかで、外側から見た場合、ここはどんな形に見えるのか急に気がかりになる。女は縮み、宇宙も縮み、幼い彼女の小さな手の上に載っている。

彼女は手の中で長い間、ひねくりまわして、汚れて凸凹になったそれを、母の耳元で振ってみせる。

「音がするわ！」

母親はびっくりしたふりをしている。

「一体なにがはいっているの？ 宝もの？ そうなの？ わかっていますね、あなたはお婆さんの家の子供ではなくて、お母さんの宝物なんだよ！」

幼い女は手に持っている汚れた繭を、母親のまえで捨てて踏みつけにする、繭は砂の中にもぐってしまいつぶれない。蛸壺のコウラ干し、黒い四角形模様のノリ干し、湧いて出る貝とその残骸の大山、水のなかで映像がてんで千切れて、満潮のあとが崖に見えている。

幼い女は砂の中から探り出した繭を持って、母親に手を引かれて家に帰る。

窓に夜と昼の間の傾斜した直線が生まれる。線の上は白や薄紅や水色、下の漆黒の底で、無数の宝石がきつい瞬きをしている。

数冊の絵本がどの頁も扇にして、ぱらぱら踊りをはじめた。

「二本の白い馬のたてがみで舟を漕ぎました。あたしは貝のなかに寝たってかまわないのだから

……」

幼い女は絵本を暗誦していて、ぼつぼつとぎれる声が穏やかに頬をすべっていく。

女は巨大な繭のような宇宙のなかで、割り当てられた宇宙全体をつかって自分にふさわしい居場所をつくりはじめる。

ここにるのが不安だという理由で、かえってここに居をかまえる計画をたてる羽目に陥って、まず、天に向かって手をあげ、手の先を見上げる。姿勢を低くしてみれば手は天にとどく、つぎに地平線に手を伸ばし、肩の付け根で見渡す限り向こうまで見極めれば、手の先は地平線のずつと先に飛び出す。女は自分の納得のいくやりかたで測量を終わり、部屋を作り上げるための計画をねる。前の部屋にあった物のほとんどは、わたしには無用の長物でしかなかったし、持ち物でさえ殆どの時間遊んでいるだけだったから、物など欲しくはないんだけど……女が視線を上げると、女から剥離した動物繊維の空は天井、山脈はカーテンになる。大きな異物は持ち込まないことにして……女は数歩歩く。歩いてみることは軽はずみなことだ。数歩歩いてみても以前の場所と区別出来ない部屋では、歩いた歩幅の合計が、この企ての皮肉な傷口の大きさになってしまう。女は傷口を大きくする歩みを慌てて押さえ、たたずみ、いまここに、意外に静かで侵しがたいじつと動かない明るさのあることに気づく。

「部屋のなかにある明るさだけで、ここは部屋になっているわ」

女は現実に対する服従から逃れて、あっさりところが完全な部屋であることを認めてしまう。

「ここは無邪気な部屋！」

テーブルも椅子も低く、女の体も低くいて、遙かに遠いカーテンの明るさを、少し軽蔑し、少し羨ましがり、カーテンから滲み出る軽やかな幻影に寄り添う。見えない顔は何重にもなつて浮かんでいる。女は話しかける。

「部屋の中でわたしはあなたに対して、真向かいに、いたことがあつたかしら、あのころは偶然に居合わせたようにいて、あなたはあなたに巻きついているものに注意を集中していたわ。なにか亡霊に憑かれたみたい……あなたは先祖代々の像がこだまになつて重なつて、輪郭が焰みたいにゆらいでいた。明るい白と暗い白だけで色のない部屋なんて退屈すぎる、もっと血色よく震え上がつてみせてよ！」

こげた点々が天井の部分に蛙の卵のように生まれてきている。

白のなかで日付が溶解する。生きなくっちゃ、わたしは静かにしているのに、吸血鬼に想いを寄せられた過去でもあつたみたいに、わたしの血の赤いさざなみをなだめようがない。

「何かしら？ 多分、あなたにまといついていて亡霊みたいなものに違いないと思うわ」

一人だけの宇宙は、耐え難いほどの恐ろしさはあるけれど、さっぱりとした快さがある。さっきまで、ここにいる自分自身が心のなかに侵入した異物のように気がかりだったけど、もう大丈夫、わたしはこのわたしの宇宙に溶解し、どう動いても外皮との間に無駄な摩擦がなくなったような気がする。

「この異物はあなただけよ！」

女は居場所をつくるという、さっきまでの情熱を、ここを部屋にしてはならないと言う、自分を脅かす情熱に変形してしまう。

「一人だけの宇宙ほどさっぱりとした快さはないもの、わたしは何時だってそれを願っていたよ。雑作なく愛に向く部屋がつくれるだなんて、小さな柔らかな部屋ですって？ あなたは亡霊につきまとわれて、わたしを忘れるのね」

本が二分の一ほどになって少しは余裕の出来た部屋のなか、障害になる本をまたいで、男はまたも旗の風呂敷を広げる。

「途方もない遺産の正体がわかったの？」

「途方もないというほどのものは見つからないけど……つまり、読んだ者の記憶に残ったり、誰かに語られたりすると、霊はぐさりと深い切り傷を受けるんだよ。だから僕は誰にも語らない、それは読んだ僕の財産だもの。その使い道は、僕次第さ！」

男は拾い読みして、和綴じの二三冊も風呂敷に突っ込み一結びしてぶらさげ、バイクの荷台に

ある大箱に移し入れる。

男がバイクで走っていく道路の脇は海に通じる水路で、モーターボートが競って幾回転か、水路の幅の半分をつかって輪を描く間、新聞紙を振り上げて風を防いでいた、ぎっしりの白い観衆が一斉に手を振り降ろし、黒い粒になって散ってしまう。

水に投げ込まれた紙をすくいとする舟がのろのろ進んでいく。

女が男を見送り、競艇場から視線を移すと、門柱の上に置き去りにされた旗の風呂敷が、畳みに風を入れて膨れては、割れるように開き、またしぼんで、つぎはもう烈風のなかを泳ぐ吹流しになり、広告塔を超える気体になってしまう。

女はそれを追って工場の門から入っていく。奇妙に黒ずんだ守衛が女を呼び止める。

「一体、何時のことですか？ 風のせいだって？ 風呂敷ですわね、旗ということになりますか？ 一体どっちなんです。色と模様は？ ああ、あれかあ、ガラクタ市で売っている九勇士の遺体を包んだ旗だとか何とか、冗談の多い説明のついでにある古色蒼然としたあれですね。見つけたら、あそこにあるポールに結び付けておきましょう。勝手な時にきて持つていって下さいよ」

守衛は左右の頬に縦皺をつくって笑顔になる。女は柔らかな体を折り曲げてお辞儀をする。

「いま捜さなければ、またどこかへ飛んでいってしまいます。すぐに捜して下さい」

女は暫くそこにおいて、掌状複葉の丈の高い植物を見ている。十一枚の小葉が集まって一つになっているもの、十二枚、八枚、十五枚、十枚、そのどれもが違っており、みんな葉先が千切れた

り欠けたりしている。女は不自然にかすれる布ずれを、戻ってくる旗かと振り返るが、自分の服の背のはためき。

守衛が無口のオウムのような奇声を一声放つ。女は敷石を蹴りながら、手のなかに植え込みの葉をしっかりと握っている。

「盗んで握って、そしらぬ顔で無事いられるなんて、葉っぱくらいなものなのね」

樹も草もない禿げ山、川、平原、空、目的地に接近していく気でも、歩けば歩くほど自分を封印することになってしまう。ここにあるのは、ゆったりとした厚ぼったい時間ばかり、いかにもそれが足跡をばらまく奇態な幽霊の本体であるかのように、天空を浮遊する焦げ色のぶつぶつが増殖している。

いまのうちに、誰にも打ち明けられない秘密があるなら、ここですっかり話し終えなければならぬ。なにか、なんにも、胸を重くしている秘密などなく、わたしは裸で誇り高く信じられないほど無傷だ。女はそれを嘲笑うが、まだ誰かに匿そうとするように、薄赤い自分の目の光を俯向いて消してしまおう。

女は俯向いた拍子に、体の重みをどつと誰かの腕にぶっつけてしまふ、ここに誰かなどいるはずもないのに……、誰かの手が冷たい感触で女の手に繋がるうと、指先をカギ型に曲げて引っかかり。指の本数を倍にもしてからんでくる。

「誰？ 手などつなぎたくないの……」

女は自動人形のように歩く、どんと当たり、胸を一掴みして逃げる手がある、女は弾みをつけられて動き、その誰かは複数になって足さえ十本にもして触れたり踏んで過ぎたりする。

「一体誰が何人いるの？」

天空には黒い斑点がソバカスのように浮いて、女はつぶやき、

「ええっ？ ええっ？ なあに？」

首を傾げて繰返すばかりだ。

「声が遠いわ。今度ばかりは家出のしそこないじゃなく、本ものの家出なんです」

女はピンクの携帯電話を閉じ、工場の芝生のなかに立っているポールを見上げる。

あの旗が高々と掲げられ、結び目の方から風の波紋が風下に向かって光の縞になって泳ぎ抜ける。時々旗の隅の三角がたたまれ、波を押さえ込もうとするが、すぐに真横に向かつて広がり、波を泳がせる。白地に書かれている墨の文字が大きな鳥の影のように寄り集まって翼を広げ、赤い丸が縦糸のすだれになって靡いたりする。

女はポールに掲げてある旗をゆっくりと降ろす。旗は風を食らって、降ろせば降ろすほど立体

的に膨れ上がり、獣になって、女は体ごと旗に呑み込まれる。

髪が分け目から火がついたように立ちのぼり、透明になる。旗のなか、女のいる膨らみと、もう一つの膨らみに別の誰かがいて、大暴れしているような。女はそんな中で独りだったり、数人だったりする。旗の膨らみは高く聳え、張り巡らされた囲みになる。内側で旗をたたくと、おなじ速さで外側からもたたかれ、へこむと同時に膨らむ。旗は夕暮れの極彩色を滲み出し、赤、オレンジ、ピンク、紫に巻き込まれて圧倒されそう。

女は首のペンダントを後ろに回し、しなやかに一回転して、旗を倍の広がりにして数歩歩く。旗は急に女の足に寄り集まる。

「変ね、どうして？」

かすかな魔法にかかって、女はそこから逃げる動きとともに、閉じこもる動きをしている。女は分身して幾つもの動きが同時に可能なのだ。ある一瞬に於いては、まだ包むというほど旗は女に、からみついてはいないで、ゆるく被さっているようでもある。

女は被さるものを潜り抜ける動きをする。

「呼吸の度に持ち上がる巨大なオッパイみたいに見えるなあ、この旗、酔っ払っているんじゃないのか……」

誰かが外から疑わしいつぶやきをしている。旗には時の底から生まれてきたような、向こう見ずな力があるのだ。

「わたしの肺や風なんかと、全然別の呼吸をして、はためくのよ」

脱け出せない、吸い付いたり、圧したり、誘い込んだり……。旗はもう何処にも辿りつけない魂みたいな動き方をし、全天をゆるがすいつもの騒音のように、女の周りを叩きつづける。

「にぎにぎしい自殺の仕方もあるもんだなあ……殺人事件がこのなかで起こりつつあるとしたら……布の下の手品だもの、すぐに両手を振り上げて生き返って見せるさ……正体を現して鳩一匹になつたりする……」

「ちよっと待って！ 催眠術にかかった女性が、マネキン人形をかつぐように運び出されていくでしょう。そのときは拍手喝采と願いましょうか！」

女は旗の中、派手な色調のまましい動きを止め、この落ち着きは死んでしまった証拠に違いないと、あらん限りの力で見、見えるもの全部を受け入れようとす。女はどこかでせいせいし、体の中が青々とする。色取りを消して巻きついて来る冷たい光線があるのだ。

急に外で蒼白い昼が唸りをあげる。

「明日になったら、誰が死んだか、殺されたか、分かるだろうさ」

どっと笑い声があがる。女は力を失っているのだ。旗は次第に飲み込んだものに内側から暴れ回られて、苦悶の末へばったという偽装の形で床を這ってしまう。

皮膚のなかの窪みに、女はひとりであつぶせになつて泣いている。大勢の何者かが歩き回つたせいか、窪みには、こすられて剥げ落ちた皮膚の粉がたまつていて、泣くと融ける雪のように顔の下で体積を小さくする。ともすれば上気した頬みたいに赤く空が輝き、焦げ色のソバカスの点々が、花粉や羽虫になつて飛び交ひ、浴槽からあがつたばかりの肌からのぼる湯気のように涙の蒸気がたゆたい、洗髪中の泡だらけの髪のような雲をつくる。

ぼつぼつ雨が降るとおもつたのに……女の期待は、深い皺のなかに落ち込み、剣道で面をうたれたときのよな煙硝の臭いをかいで裏切られる。よく見れば天空にあるこげ茶色の点々は地にも空にも散つていて、得体の知れない誰かの目印。

充ちている者の間で女の肉体は水のように軟らかくなる。彼らに触れられ押されるそれが、上空や地上で皮膚の繊細な触覚をふるわせはじめ、痛み、かゆみ、しびれ、すべてありとあらゆる触感になつて一どきにくる。

女はそれから逃げ回り、投げられている網のよななかゆみの感覚一つにとらえられ、気づくと、女の肌は掻く手で血が流れている。女は、女の正体のように行方不明になるかゆみに、もう逃げ場所、傷から毛細血管に入るか、口から胃に入り込むか、自身に自らが隠れるより方法はない。

自分の体のなかで女は、白から黄、茶、赤などの色の通り過ぎるのを見、ずきずきと激しい動脈の音を聞き、苦もなく自分のなかを自分が横切っていく忍耐を乗り切って、視界が晴れて明るくなるのを見る。

それはなにか、もっと広大な危険の中に投げ出されたような、不意打ちの眩暈。

女のもっている内的外的な仕組みが、一瞬に変化してしまい、どうなったのか理解できない。……顔が後ろ前についているんじゃないかしら。ただの宙返りだったのかもしれない、ぶつからずにするりと体の向こう側にくぐり抜けたのかもしれない。遠心力で体が絶えず稀薄化して、遠くに飛ばされているとしか考えられない、影のない明るさ……それは女の骨髓か、腹腔から発してくる白い光のようでもある。

靄が、一区切りずつ濃淡をつくってきて、吸うと薬臭い匂いだ。靄は、まだ生え揃わない女の皮膚の痛みを包んで、優しく保護する。

ふっと、青く水分を含んだ窓らしい矩形が浮かんでいる。嗅ぎ覚えのある懐かしい薬の匂いが強臭になる。

女は靄の源を辿っていく。

ドアを開けると、そこには使い古しのくしゃくしゃのポリ袋のような大きな人物が、不揃いの足を投げ出し、わたしの母がその人物を懸命に支えている。

袋人間の肩をつかんで、浮き上がらないように押さえ込んでいる母の耳の後ろに、その人物は

顔を向けて、ぼうぼうと白い吐息を吐き出し、それが室外まで流れ出しているのだ。

「誰かしら？ わたしの宇宙が行方不明だけれど……」

女はたじろぎ、困惑し、すくんで、ドアのかけからこっそり観察しつづける。

……わたしを吐き出して生き返ったとでもいうの……。

その人物の白い吐息で、母の短くカールした後襟首の髪がすっかり白くなり、首筋には干からびた白い溝を並べた畝をつくってしまう。

女の皮膚は、心があるかのように縮んだ手で、わたしの母の髪から粉を優しく払い落としては、一人前以上に生存している証拠の大きな呼吸をしている。

母は女の皮膚に、わたしのものである白いへりのついたブルーのガウンを、優しく包帯でもするようにつっくりと着せる。女の皮膚は耳まで蔽うほど襟を立てて、母の肩に顎をおき休息をとっている様子だ。

二人の抱き合う肩に通り抜ける白い息が、光と影のように交代し、いたわりの言葉が交わされているらしい。

吐き出す白い粉は皮膚のなかに寄生していた生物みたいに飛び散っていく。女は頭をくらくらさせ、次には激しく脅えてしまう。

女の皮膚は、ふたを開けた浦島の玉手箱のように白い煙を吐いて、わたしの母の髪を白く染め、自からも白髪になって、瞬く間に何十年か飛び越えた未来をつくり出してしまっそうだ。

完